Front Line フロント・ライン

閑話独言

舞子から芸子へ

やまがた芸子
菜乃葉さん

小学生のころ、祖母の家でテレビに「やまがた舞子さんたち」が映っているのを目にしました。「大きくなったら、舞子さんになってみたら」と祖母は話しましたが、まさか舞子になり、そして２月から芸子として再出発することになろうとは思いませんでした。引っ込み思案で、「どこにいるのか分からない」と言われるほど消極的な性格で、舞子さんは私にとっては、ただただ憧れの存在にしか過ぎませんでした。

高校に入ったときに、友人のお母さんから「私も引っ込み思案だったけれど、演劇部に入って直すことができた」と、アドバイスをいただき、演劇愛好会に所属しました。愛好会なので大会などには出ずに、校内の文化祭で創作劇を披露しました。思いかけず拍手と、良かったよとおほめの言葉をいただきました。

そうして、卒業後の進路を決める段階になって、「やまがた舞子募集」の案内が学校にあり、思い切って応募し、東日本大震災の年の2011年３月、紗弥さん、柑菜さんと私の３人が舞子８期生として、山形伝統芸能振興㈱に入社することができました。

お師匠さんは立ち振る舞いに厳しいのですが、芸については盗んで身に着けなさい、分からなかったら聞きなさい、という教え。私の踊りはまったくだめなうえ、ためらってばかりで聞くこともできません。このままでは何のために舞子になったのか、情けないと思い、2013（平成25）年２月、千歳館で開かれたやまがた舞子伝承の夕べで、歌舞伎十八番の１つ「外郎売（ういろううり）」に挑戦しました。

300年前に２代目市川團十郎が舞台に掛けた小田原産の丸薬（外郎）を売り歩く演目で、長ぜりふと早口早言葉が特徴です。ほたるさん（現・芸子雪路さん）が熱演しましたが、その後継者を探していたようで、私は思い切って手を挙げました。お師匠さん方は驚いたようですが、演劇愛好会で発音練習を少しかじっていましたし、何よりも、ここで一歩踏み出さなければという思いでした。「ほめられて有頂天になってはいけない」と教えられており、肝に銘じておりますが、皆様方から拍手をいただき、少し自信がつきました。

20歳のときに父を亡くしました。47歳でした。最初は舞子になることには反対でしたが、「自分の決めた道ならば、最後までやり遂げなさい」と励ましてくれました。舞子の第１期生で、芸妓として活躍している菊弥姐さんは、雑誌などのインタビューで「山形花柳界の灯を消したくない」と話しています。花柳界は厳しいときを迎えているようですが、私も姐さん方の教えを受け継ぎ、小さくとも灯をともし続けていきたいと思っています。後輩の舞子共々、会員皆様方のより一層の御ひいきをお願いします。

今月の表紙　「旅篭町・丸八やたら漬」

ふるさと画家・上野啓太氏作。「わが町」をテーマに、イラストでまちおこし運動を行っている「やまがたマーチング委員会」（事務局・㈱大風印刷）提供。